



Title	女性の自立をうながす布：インド・グジャラート州におけるSEWAの取り組み
Author(s)	岡田，弥生
Citation	a+a 美学研究. 2024, 15, p. 64-73
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103387">https://doi.org/10.18910/103387</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 女性の自立をうながす布

——インド・グジャラート州におけるSEWAの取り組み

インドでは一枚の布に社会を動かす力があると思なされてきた。その布はカディー(Khadi)と呼ばれ、手紡ぎ手織りで作られる素朴な布である。カディーを広めたのは、他でもないマハトマ・ガンディー(M.K. Gandhi 1869-1948)である。彼は、スワデシ(国産品愛用)やスワラージ(自治)といったスローガンのもと、職を失った農村部の人々がカディーの生産によって収入を得ることで、国中に蔓延する貧困状態を改善し、ひいては植民地主義による支配的な経済構造から脱却できると考えた<sup>『』</sup>。この歴史を背景に、インドでは現代でもテキスタイルの生産がNGOや政府による開発の現場でしばしばおこなわれる。本論は、一九七二年に設立されたインド自営女性協会(Self-Employed Women's Association / SEWA)が取り組むテキスタイル事業の意味と役割を分析し、それがいかに社会のなかで変化をうみだす力となっているかを明らかにする。そしてそのなかでソーシャルデザインの課題について考えたい。

### インド自営女性協会

インド自営女性協会(SEWA)は、一九七二年グジャラート州アフマダバードに誕生した団体である<sup>『』</sup>。もとは、繊維工労働組合(Textile Labour Association / TLA)の女性部門としてはじまり、当初は工場で働く人の配偶者や子に縫製、糸紡ぎ、編み物、刺繍といった技術の訓練をおこなうことを目的としていた。SEWA発足のきっかけをつくったのは、一九七一年にTLAを訪れた女性たちだという。その女性労働者たちは、アフマダバードの布市場でカートや頭の上に荷物をのせて運ぶことを生業にしていた。しかし、過酷な労働に対してわずかな賃金しか支払われず、とても不安定な生活を送っていた。この女性労働者らの声を地元の新聞に掲載したのがSEWAの創設者エラ・バット(Ela R. Bhatt, 1933-2022)である。頭上に物をのせて物を運ぶヘッドローダーや、野菜売り、中古衣類のディーラー、手工業者といった仕事をおこなう女性の存在を可視化し、女性たちが労働者としての正当な権利を主張できるようにするためにバットらは尽力し、一九七二年にSEWAは州労働局によって労働組合として認可された。

SEWAの組合員はおもに次のような労働者によって構成される。一、露天商や行商人、二、家内制手工業者、

三、その他の労働者やサービス従事者、四、農家や畜産家といった、開発途上国にみられる非公式な経済活動である、いわゆるインフォーマルセクターで働く労働者である。テキスタイルにかかわる労働者は、古着の露天商であれば一、刺繍や染織の職人であれば二、裁縫職人であれば二や三だろう。SEWAの組合員は、固定された雇用主との雇用関係がなく、自身の労働に依存して生計を立てている自営業者である。こういった労働者の多くは経済的に貧しく、資産や資金をもっていない。また、識字率も高くはないため、社会的に脆弱な立場にある。しかし、こうしたインフォーマルセクターにおける労働者はインド国内にかなりの数で存在するため、支援は国全体の経済にも影響をあたえうる。

### 布と貧困

SEWAは染織工の労働組合から始まったという歴史もあり、現在でも織物や刺繍、縫製といったテキスタイルの生産に携わる職人が多く加入し、また傘下に独自の組織も形成している。つまり、SEWAの活動にはテキスタイルが大きな役割を果たしている。社会問題の解決をめざすSEWAと布とが深い関わりをもつ理由はその歴史以外に二つあると考えられる。

ひとつに、貧困層の多くが刺繍や織物の職人の家系出身であることである。バットの著書によると、SEWAが一九八〇年代にグジャラート州のケダという地域でタバコ生産の労働者の支援をしていたとき、労働者の多くが織物を生業とする家系出身であることが分かったという<sup>3)</sup>。しかし、土地をもたない労働者は植民地下でダリット（不可触民）とみなされるようになり、織物業がたちゆかなくなったときには、タバコ農家に雇われることで生計を立てるようになった。タバコの生産は健康被害が大きく、法律で定められた最低賃金すら支払われない労働者が多数存在したため、SEWAがタバコ関連の労働者たちを集め支援をおこなっていた。ところが、労働者の多くは高度な織技術をもった職人であったことが明らかになり、労働者たちは伝統的な家業への復帰を望んだ。織物の生産は伝統的に男

性の仕事とされてきたが、SEWAの調査によって多くの女性たちも技術と知識をもっていることが判明した。家に織機さえあれば子どもの面倒をみながら働くことができるため、織物の生産が開始されると、女性たちの労働環境は、タバコ農場や工場に働きに出かけるよりも、望ましいものとなった。このケダ地域の事例から分かるのは、女性の経済的自立をうながして貧困の連鎖を断ち切ろうとする原動力としてのテキスタイルの役割である。

### SEWAにおけるカディー思想

もうひとつは、ガンディーの説いたカディー（*Kadi*）の思想である。前述のように、SEWAのもととなった労働組合の設立にはガンディーが携わっている。ガンディーは手紡ぎ手織り布「カディー」の生産と使用がインドの独立への手段だと考え、インド全土にそれを普及させた。SEWA創設者バットは著書のなかでたびたびカディーについてふれ、それがいかにSEWAの活動のなかで捉えられるべきか説明する。

手仕事、自給自足、雇用、持続可能性、地域の主体性といった、カディーにそなわる精神や考え方についての洞察を私たちはつい忘れがちだ。しかし、この考えを念頭においておけば、生活のあらゆる場面や日用品のうちに、世界を変えるきっかけとなる「カディー」を見つけることができる。私のカディーに関する理解が広がるにつれ、その定義の幅も広がった。私はカディーを、配慮のある経済を築くものだと考えている。食料、水、住居、衣服が地元で調達され、地元で製造され、地元で消費されるような、生産者と消費者が出会う機会のある地域経済である。そうだとすると、マッカ（水を保管する陶器の壺）も、手織りの布も、裏庭の野菜畑も、そして、私の屋上の雨水タンクもすべてカディーなのだ<sup>4)</sup>。

ここでバットは、カディーをこれまでのガンディーの布ではなく、自立や持続可能性、地域性を重視する経済のあり



図1 | STFCにおける縫製の様子  
2023年(筆者撮影)



図2 | アフマダバードにあるHANSIBAの店舗  
2024年(筆者撮影)

方だと述べる。SEWAが布をはじめとする手工芸を社会問題の解決にもちいるのは、それらの伝統的な生産方法がバットの考えるカデーの理念を体現するためだろう。手工芸は農村部の人々のライフスタイルに取り込みやすく、そういった地方に住む人々の生計手段となりえる。また、使用する原料などにもよるが手工芸は比較的環境負荷が少なく、持続可能な経済活動だといえる。職人がそれぞれ独立し自らの意志で労働に関することを決められるのなら、不当な労働環境におかれる可能性を回避し、主体的な働き方を実現することができる。SEWAの活動において、カデーのカデー思想は変化を遂げながらも受け継がれ、今日でもテキスタイルと人と社会とが独自の関係を築き上げる基礎となっている。

### SEWAの役割

SEWAが各地の職人に行う支援は、資金の貸与、技術やデザインの教育、資材の提供、市場と職人との橋渡しなど多岐にわたる。SEWAの職員との対話を通して、SEWAが特に重視しているのは市場を理解するためのデザイン教育や仲介であることがわかった。職人の多くは都市から離れた地域に居住するが、現在のところ実際に手織りや刺繍布の需要があるのは都市部である。職人たちは、商品を作ることができても、どこでどのようなものを販売したらよいかといった情報を得ることがしばしば困難である。そこでSEWAのひとつの機関であるSEWA Trade Facilitation Centre (STFC) は、職人と市場をつなぎ、販路を提供する。具体的には、STFCが各地方の事務所経由で職人に資材を提供し、それを使って職人が商品を完成させる。地方事務所が商品を回収し、都市部のSTFCへと返送する。STFCは縫製「図1」や検品を行い、その後STFCがもつ店舗HANSIBA「図2」やオンラインサイトで商品を販売する。

デザインに関しては、都市部の消費者は伝統的なデザインよりも、シンプルなデザインを求める傾向にある。需要にこたえなければ、十分な売上をえることは難しいため、市場の動向をふまえたデザインの商品を生産する必要





図3 | HANSIBAの商品  
2024年（筆者撮影）

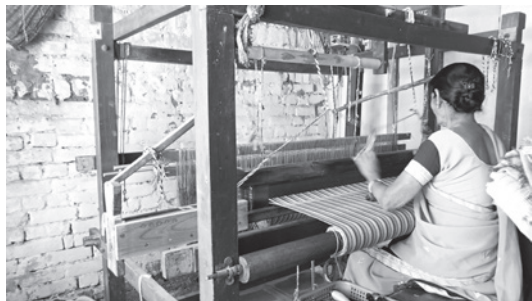


図4 | SEWAの手織り職人  
2024年（筆者撮影）

がある。そのために、STFCは、職人と情報の共有を行う。デザインの教育や商品のデザインを担当するのはNational Institute of Fashion Technology (NIFT)やNational Institute of Design (NID)といった専門機関出身の人物である。伝統的な布のデザインは、全面にモチーフが施されたり、鮮やかな色づかいがなされたりするが、消費者はより少ないモチーフや落ち着いた色味のものを好むらしく、そうした商品を生産することで、より多くの販売を見込むことができる。〔図3〕

#### 手織り職人をとりまく生活の変化

筆者は、二〇二三年一月から二〇二四年二月にかけて、インドにおいてフィールドワークを行い、SEWAの織物組合に加入する手織り職人に話を聞く機会をもった〔図4〕。そこで、SEWAに加入して以降、それぞれ職人の制作活動や生活にどのような変化がみられたかについて尋ねた。一人の職人は、市場に関する理解が進み、SEWAの講習から得た知識をデザインに反映できるようになったという。また私生活では、主に経済面でよい影響があったと語る。例えば、貯蓄や子どもの教育にお金をまわせるようになり、また、住宅ローンを組めるようになったと語る。さらに、農場で働いていたときは就業中に子どもの面倒がみられなかったが、織物をするようになってから家で子をみられるようになったとも話す。この職人は仕事にやりがいも感じているとのことと、伝統を受け継ぐことを誇りに思うということだった。また、別の職人は四人の子どもに教育を受けさせることができ、家も買うことができたという。この職人は現在、他の織り職人を集めており、事業

の拡大を目指している。

このような変化の背景にカディーの思想がどのように関わっているのか手がかりをえるために、職人たちにカディーについて問いかけたところ、興味深い返答を耳にすることができた。カディーの生産は手紡ぎ糸を使うことが前提とされるが、話を聞いた職人たちはみな機械製の糸を使用しているとのことだった。ひとりは「すべての職人がカディーの生産が可能なのではない」という。手紡ぎの糸の生産には手間と時間がかかり、機械製の糸と比べると高価な割に堅牢性に欠ける。多くの職人にとって高価な資材を入手することは容易ではない。また、手紡ぎ糸を使用するカディーは市場で売られるときも高価になるため、機械製の糸を使った手織り布よりも需要は少ないとされている。経済的な自立をうながすカディーの思想はSEWAの組織としての理念には受け継がれているものの、実際のところ手紡ぎ糸の強度や価格が課題となり、話を聞いた職人たちはカディーの生産を行っていないようであった。

#### ソーシャルデザインとしてのSEWAの布づくり

ここまで、SEWAが活動にいかにかテキスタイルを取り入れ、職人を支援することで、職人とその家族の生活に変化を与えてきたのかを紹介した。長らく疎外されてきた特に女性労働者の生活上の問題の解決がSEWAの目的である点において、その布づくりはソーシャルデザインの活動の例とみなしうるが、SEWAにおいてデザインはどのように捉えられているのか。このことは、バットの次の言葉から窺うことができる。

「デザイン」を生活や生計から切り離して理解することはできない。デザインは「労働」と「労働者」の身体の一部であり、互いに一体となり、絡み合っている。また、デザインは、理念の象徴であり、人々と地球とをやることで、自身の生活をよりよくすることを意味する。よいデザインは生活状況と家計を、耐え凌ぎやすく、住みやすく、そして手ごろなものにする〔図5〕



図5 | SEWAの職人が制作した手織りのサリー  
2024年（筆者撮影）

バットの言葉と手織り職人の事例を照らし合わせてみると、デザインは消費者だけでなく職人の生活にも密接に関わっている。デザインは、職人のよりよい生活を生み出す原動力となるだけでなく、大きなコミュニティを形成する。そして、そこで作られる布は国内にとどまらず国外に対しても労働者たちの存在をあらわす指標となっている。しかしながら、同時にその課題もみえてくる。それは、利益の追求と問題解決との均衡である。例えば、職人たちの生活を安定させるためには、安全な居住空間、清潔な水を蓄えるタンクなどが必要であり、また子どもの教育にも相応な費用がかかる。利益が得られてこそ、職人が抱える問題は解決へと導かれる。事実、STFCでは高度な教育を受けた人物がデザインを担当しており、これは必要な利益を得るための対策だろう。しかし、今後は職人自身もデザインのプロセスに参加でき、かつ後継者を育成できるように制度を構築することが望ましいと考える<sup>『』</sup>。なぜなら、利益を見込んだ商品作りはたしかに必要である一方で、デザインを与える者と与えられる者とがあまりに区別されていると両者の間には力関係の差が生じかねないし、また、地元固有の色使いやモチーフが市場の需要にかきけられてしまい職人たちが培ってきた美意識が失われる可能性もあるからだ<sup>『』</sup>。経済成長目覚ましい現代のインドにおいてSEWAは新たな局面を迎えつつあるといえる。小さな声に耳を傾けながら社会に変化をもたらし続けてきたそのテキストル事業は、これからのソーシャルデザインのあり方を私たちに問いかける<sup>『図5』</sup>

岡田弥生（おかだ・やよい）  
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程。専門はインドの染織文化。

#### 註

- \*1 | Mohandas Karamchand Gandhi, *Khadi (Hand-Spun Cloth): Why and How*, ed. Bharatan Kumarappa (Navajivan Publishing House, 1955), 3-7.
- \*2 | Ela R. Bhatt, *We Are Poor but Mary: The Story of Self-Employed Women in India* (Oxford University Press, 2006), 3-46; "Birth of SEWA," SEWA, accessed January 10, 2024, <https://www.sewa.org/about-us/history/>
- \*3 | ケダ地域におけるSEWAの活動は以下を参照。Ela R. Bhatt, *Anubandh: Building Hundred-mile Communities* (Navajivan Publishing House, 2015), 80-84.
- \*4 | Ela R. Bhatt, *Women, Work and Peace* (Navajivan Publishing House, 2020), 247.
- \*5 | Bhatt, *Women, Work and Peace*, 33.
- \*6 | Kasturi は以下においてインドの工芸の今後のあり方を論じるなかで、デザイナーは職人にデザインを提供するのではなく、デザインの過程を手助けする存在であるべきだと提案する。Poonam Bir Kasturi, "Designing Freedom," *Design Issues* 21, no. 4 (2005): 68-77.
- \*7 | NGOの活動がカッチラバリーの人々の刺繍文化や生活に影響を与えた事例。上羽陽子「NGO商品を作らないという選択—インド西部ラバリー社会における開発と社会変化」『地域研究』一〇巻二号（二〇一〇年）二〇四—二二三頁。